

グリムとベヒシュタインの「白雪姫」における 心理描写について

柳 泉

1. はじめに

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン (Ludwig Bechstein 1801-1860) は、「グリム兄弟と並ぶ、ドイツの伝説と童話の最も重要な収集者である」¹⁾と評価されている。『ルートヴィヒ・ベヒシュタインの童話集』最終版 (Ludwig Bechsteins Märchenbuch 1857)²⁾には、「白雪姫」、「ヘンゼルとグレーテル」、「赤ずきん」、「いばら姫」、「灰かぶり」など、グリム兄弟 (Jacob Grimm 1785-1863, Wilhelm Grimm 1786-1859) の『子供と家庭の童話集』最終版 (Kinder- und Hausmärchen 1857)³⁾にも収録されている童話がある。『ドイツ児童文学史』(Geschichte der deutschen Kinder- und Jugendliteratur 2002)によれば、「ドイツでは、19世紀後半から20世紀に入るまで、ベヒシュタインの童話集はグリム兄弟の童話集よりも人気があった。」⁴⁾さらに、ベヒシュタイン童話集の人気理由として、ルートヴィヒ・リヒター (Ludwig Richter 1803-1884)による187枚もの挿絵を載せたことが挙げられている⁵⁾。しかし、ベヒシュタインの童話集が読者を魅了した要因は、挿絵だけではなく、叙述の仕方にもあるのではないだろうか。『ドイツ児童文学史』では、「ベヒシュタインの語りは喜劇的效果を狙っていて、笑い話においてその才能を存分に発揮している」⁶⁾と分析されている。一方、グリムのメルヒェンの特徴として、本来のメルヒェンには見られないのであるが、登場人物の心理状態が語られていることが挙げられる。例えば、上記のメルヒェンの中では、特に「白雪姫」において心理描写が多く見られるので、ここでは「白雪姫」を取り上げ、グリム兄弟とベヒシュタインの「白雪姫」における登場人物の心理描写について、両者を比較したい。

2. メルヒェンの心理描写について

ヨーロッパのメルヒェンの文体を研究したマックス・リュティ (Max Lüthi 1909-1991) は、心理描写について次のように述べている。「メルヒェンの登場人物には、感情的世界そのものが欠けており、したがって、いかなる精神的奥行きもない。」⁷⁾メルヒェンの登場人物の「性質や感情は、話の筋の中で表現される。」⁸⁾それゆえグリムの「ラプンツェル」における一文、「王子は苦しみで我を忘れ、絶望のあまり塔から飛び降りた」(Der Königssohn geriet außer sich vor Schmerz und in der Verzweiflung sprang er den Turm herab) を例に挙げて、「我々の定義からすると、ヴィルヘルム・グリムのこの文章は、真の民衆童話の文体にふさわしくない」⁹⁾とリュティは述べている。グリムのメルヒェンでは、行動による登場人物の心理描写ではなく、行動の動機として登場人物の心理状態が語られている。

グリム兄弟の「白雪姫」(Schneewittchen) とベヒシュタインの「白雪姫」(Schneeweißchen) は、結末を除けばほぼ同じ話であるので、(1)白雪姫、(2)王妃(白雪姫の継母)、(3)その他の登場人物に分けて、場面ごとにそれぞれの登場人物の心理描写を確認する。心理描写を表す言葉の手がかりとして、Dornseiff(2004)による感情を表す言葉(Fühlen, Affekte, Charaktereigenschaften)¹⁰⁾と Helbig/Buscha(1996)による発話導入動詞(Redeeinleitende Verben)の思考・感情型動詞(Verben des Denkens und Fühlens)¹¹⁾を参考にする。

3. 登場人物の心理描写

(1) 白雪姫

白雪姫の心理状態は、次の6つの場面において述べられている。①獵師に殺されそうになる場面、②森の中での場面、③小人の家での場面、④小人たちとの出会いの場面、⑤物売りに変装した王妃との場面、⑥王子との出会いの場面である。それぞれの場面における白雪姫の心理描写に関して、感情を表す言葉と思考・感情型動詞を表1にまとめた。

6つの場面の中で、グリム版とベヒシュタイン版の白雪姫の心理描写に違いが現れている場面は、④、⑤、⑥の場面である。この3つの場面での白雪姫の心理描写を比較して、ベヒシュタイン版の白雪姫の人物像及び心理的表現の特徴を挙げていく。

表1 白雪姫の心理描写

場面	グリム版	ペヒシュタイン版
①猟師	fing an zu weinen	jämmerlich weinte
	—	die Thränen und der Jammer des unschuldigen Kindes
②森の中	angst	angst und bange
	nicht wußte	fühlte
③小人の家	nicht wegnehmen wollte	—
④小人たち	erschrak	sich vor den Zwergen fürchtete
⑤物売り (飾りひも)	dachte	—
	kein Arg hatte	nichts Arges dachte
⑤物売り (櫛)	so gut gefiel, daß es sich betören ließ	sich wünschte
	dachte	nichts Arges dachte
⑤物売り (りんご)	anlusterte	lüstern wurde
	nicht länger widerstehen konnte	—
⑥王子	gut	—

・特徴1：人間的な感情を持つ女の子（④小人たちとの出会いの場面，⑤王妃が物売りに変装して小人の家にやって来る場面）

小人の家で眠ってしまった白雪姫は，翌朝目を覚まし，小人たちと出会う。グリム版では，白雪姫は小人たちを見て驚く（erschrak）。ペヒシュタイン版の白雪姫は小人たちを見て怖がる（fürchtete sich vor den Zwergen）。メルヒェンには，「一次元性」（Eindimensionalität）と呼ばれる特徴があり，メルヒェンの登場人物は，小人（Zwerge），魔女（Hexen），竜（Drachen）のような人間以外の存在が「まるで自分たちと同類のものであるかのように彼らと交渉を持つ」¹²⁾のである。「一次元性」という観点から見ると，この場面ではグリム版とペヒシュタイン版，どちらの白雪姫にもその特徴が見られない。「伝説は，現実の人間や物を写實的に描く」¹³⁾とリュティが分析しているが，ペヒシュタイン版の白雪姫は小人たちを恐れていることから，メルヒェンの登場人物というよりは，むしろ我々読者のような現実世界の人間に近い特性を持った登場人物として描かれている。

次に，物売りに変装した王妃と白雪姫の場面である。白雪姫が生きていることを知った王妃は，物売りに変装して小人たちの留守中に3度やっ

て来る。王妃は、飾りひも (Schnürriemen/Halsschnüre)¹⁴⁾、櫛 (Kamm)、りんご (Apfel) の順に売りに来る。白雪姫の心理状態に違いが見られるのは最初の飾りひもの場面である。グリム版の白雪姫は、物売りが正直な女性だから家に入れても良いと思うのだが (»Die ehrliche Frau kann ich hereinlassen«, dachte Schneewittchen)、ベヒシュタイン版の白雪姫は、物売りの女性が持っていた美しいアクセサリーを見て、悪いことはないと考える (Da dachte Schneeweißchen nichts Arges)。グリム版の白雪姫が人柄を見て判断しているのに対して、ベヒシュタイン版の白雪姫は品物を見て判断している。ベヒシュタイン版の白雪姫は、装飾品、おしゃれに興味のある年頃の女の子として描かれているのである。

・特徴2：本来のメルヒェンの語り方 (⑥王子との出会いの場面)

小人たちからガラスの棺を譲り受けた王子は、家来たちに白雪姫が納められたガラスの棺を運ばせる。運んでいる途中で、家来 (グリム版では家来全員、ベヒシュタイン版では1人の家来) が (グリム版では灌木の茂みに、ベヒシュタイン版では木の根に) つまづく。その拍子に白雪姫の口からりんごのかけらが出てきて、白雪姫は生き返る。白雪姫は、王子から今までのいきさつを聞き、プロポーズを受ける。王子からのプロポーズを受けて、グリム版の白雪姫は良いと思い (Da war ihm Schneewittchen gut)、王子と一緒に城へ行ったのに対して、ベヒシュタイン版では、白雪姫の王子に対する気持ちは語られず、王子がすぐに白雪姫を自分の父親の城に連れて行ったこと (führte es auch gleich in seines Vaters Schloß) が述べられている。白雪姫の王子に対する気持ちは、王子について行ったことで示されているのである。メルヒェンの登場人物の特性や感情は話の筋の中で表現されることがメルヒェンの特徴である。この場面において、行動によって登場人物の心理状態を表現しているベヒシュタインの語りは、本来のメルヒェンの語りである。

(2) 王妃 (白雪姫の継母)

王妃の心理状態は、グリム版、ベヒシュタイン版共に、鏡に「国中で一番美しい女性」(die schönste im ganzen Land) を尋ねる場面と白雪姫を殺した後の場面、白雪姫の結婚式の場面で語られている。鏡の答え、白雪姫

の殺害方法と共にそれぞれの場面における王妃の心理状態を表2にまとめた。

王妃についても、ベヒシュタイン版の心理描写の特徴を挙げていく。

・特徴1：重要な場面では細かい心理描写（鏡②，鏡⑦）

グリム版とベヒシュタイン版における王妃の心理描写を概観すると、グリム版は細かく、ベヒシュタイン版は短く語られている。ベヒシュタイン版では、王妃の心理状態が端的に語られている中で、白雪姫が7歳になった時（鏡②）と結婚式前の場面（鏡⑦）においては、王妃の心理状態が詳しく語られている。この2つの場面は、鏡の答えが王妃から白雪姫に変わる場面である。王妃にとって心理的に衝撃の大きい場面で、王妃の気持ちを細かく描写しているのである。

・特徴2：1度しかない感情（鏡②）

王妃の感情を表す言葉として、グリム版では *erschrak* が3回使われている。それに対してベヒシュタイン版で *erschrak* が使われているのは1回で、それは、白雪姫が7歳になった時の場面（鏡②）である。白雪姫の方が美しいと鏡が最初に答えたこの場面において「死ぬほど」(zum Tode) と共に *erschrak* を使うことで、お妃の心理的衝撃を表現している。¹⁵⁾

・特徴3：ユーモアのある比喩による感情表現（鏡④）

飾りひもで白雪姫を殺したにもかかわらず、鏡が白雪姫と答えた時の場面（鏡④）で、ベヒシュタイン版では、「王妃の心臓は怒りで蛙のお腹のように膨れ上がった。」(Da schwoll der Königin das Herz vor Zorn, wie einer Kröte der Bauch) 王妃の怒りを蛙の比喩を用いてユーモラスに語っている。

・特徴4：王妃の感情，行動の理由（鏡②）

グリム版では、王妃が満足した理由（鏡①）、驚いた理由（鏡③，鏡④）、白雪姫を殺す方法を考えた理由（鏡③）が述べられている。感情や思考の理由が説明され、より詳細に王妃の心理状態が語られている。

反対に、ベヒシュタイン版では、感情が行動の理由として語られている。

表2 王妃（継母）

場面	die schönste/ 殺害方法	グリム版	ベヒシュタイン版
鏡①	王妃 (質問後)	zufrieden	—
		wußte	—
鏡②	白雪姫 (質問後)	erschrak	zum Tode erschrak,
		gelb und grün vor Neid ward	—
		haßte	—
		der Neid und Hochmut wuchsen Tag und Nacht keine Ruhe hatte	vor ihrem bösen neidischen Herzen weder Tag noch Nacht Ruhe hatte
白雪姫の死①	肺と肝	meinte	vermeinte
鏡③	白雪姫 (質問前)	glaubte	froh
		dachte	meinte
	白雪姫 (質問後)	erschrak,	—
		wußte, merkte, sann und sann	— — sann
白雪姫の死②	飾りひも	—	—
鏡④	白雪姫 (質問後)	erschrak	—
		—	vor Zorn
		—	sann
白雪姫の死③	毒の櫛	lachte	—
鏡⑤	白雪姫 (質問後)	vor Zorn	sich vor giftiger Wut darüber wußte
白雪姫の死④	毒りんご	—	—
鏡⑥	王妃	ihr neidisches Herz Ruhe hatte	zufrieden
鏡⑦ (結婚式前)	若い王妃	—	nicht wußte,
		—	vor Neid und Scheelsucht,
		angst	bange
		gar nicht kommen wollte	gar nicht gehen wollte,
		keine Ruhe	—
結婚式		—	sehen wollte
		vor Angst und Schrecken	vor Schrecken

白雪姫が7歳の時に（鏡②）白雪姫の方が美しいと鏡に言われた「王妃は、嫉妬心で昼も夜も落ち着かなくなったので」（weil sie weder Tag noch Nacht Ruhe hatte vor bösen neidischen Herzen），王妃は獵師を呼んで、白雪姫を森へ連れて行き、殺して肺と肝を持って来るよう命令する。王妃の白雪姫への嫉妬の気持ちが、獵師への命令という行動の理由として述べられている。

・特徴5：嫉妬（Neid）と結末

毒りんごで白雪姫を殺した後、王妃は再び最も美しい女性となり、グリム版では王妃の嫉妬心（ihr neidisches Herz）が落ち着く。7歳の白雪姫に負けて芽生えた王妃の嫉妬心が、白雪姫に勝ったこの場面で収まり、完結を見せている。

白雪姫が生き返った後、鏡は「若い王妃」（die junge Königin）が美しいと答える。ベヒシュタイン版では、「王妃は、嫉妬と妬みで何を言えば良いのか、何を始めれば良いのかわからなかった」（Da wußte die Königin nicht, was sie vor Neid und Scheelsucht sagen und anfangen sollte），と再び嫉妬の気持ちが表現されている。

結婚式に行った王妃は、鏡が言っていた若い王妃が白雪姫であることを知る。グリム版では、王妃は真っ赤に焼けた鉄の靴を履かされ、死ぬまで踊り続けることになる。王妃が結婚式に招待されたこと、鉄の靴が用意されていたことから、王妃へのこの罰は、白雪姫によるものと読み取ることができる。一方、ベヒシュタイン版では、白雪姫は大きな気高い心（ein großes edles Herz）を持っていて、王妃に罰を与えない。王妃は虫（Wurm）によって心臓を食い尽くされてしまう。「この虫は嫉妬であった」（dieser Wurm war der Neid），と述べられて、ベヒシュタインの「白雪姫」は終わるのである。王妃の嫉妬心は、白雪姫7才の場面（鏡②）で芽生える。この嫉妬の気持ちが獵師に白雪姫を殺して肺と肝を持って来るよう命令した理由であり、最後に再び呼び起こされた嫉妬の気持ちが王妃に罰を与えるのである。

(3) その他の登場人物

ここではその他の登場人物である①王妃（白雪姫の実母）、②王、③漁師、④小人たち、⑤王子を取り上げ、心理描写を見ていくことにする。それぞ

れの登場人物の心理描写を表3にまとめた。

・特徴1：精神的奥行きのある登場人物

ベヒシュタイン版では、王妃、王、獵師、小人たち、王子、すべての登場人物の心理描写が確認されたが、グリム版では、王の心理状態は語られていない。王は唯一、白雪姫と直接かかわりのない人物である。グリム版では、白雪姫と直接かかわりのある人物のみ、その心理状態が語られていると言える。一方、ベヒシュタイン版では、白雪姫と直接かかわりのない王の気持ちが語られている。白雪姫出産後に王妃が亡くなり、王は再婚する。グリム版では、単に「1年が過ぎ、王は新しいお妃を迎えました。」(Über ein Jahr nahm sich der König eine andere Gemahlin.)と述べられているだけであるが、ベヒシュタイン版では、「男やもめでいたくなかった」(kein Witwer bleiben wollte)と、心理描写で再婚の理由を語っている。

また、王妃の心理状態に関しても、ベヒシュタイン版では細かく語られている。グリム版でも、ベヒシュタイン版でも、白雪姫の実母である王妃は、子供を望んでいる。どちらも、王妃は窓から雪を見て、「子供がいたら」と思う(dachte)のであるが、ベヒシュタイン版では、冒頭にも子供を望む王妃の気持ちが語られている。「昔むかしあるところに王妃がいました。この王妃には子供がいませんでした。王妃はひとりぼっちでしたので、子供を望んでいました。」(Es war einmal eine Königin, die hatte keine Kinder und wünschte sich eins, weil sie so ganz einsam war.)と、王妃が子供を望む理由が述べられている。グリム版では、王妃が子供を欲しがる理由は述べられていない。

さらにベヒシュタイン版では、子供が生まれた時の王妃の喜びの気持ち(Die Königin freute sich)が語られているのだが、グリム版にはない。

・特徴2：重要な場面で心理状態を語る (④小人たち：りんご)

ベヒシュタイン版では、全ての登場人物の心理状態を語る一方で、同じ人物が同じような出来事に遭遇した時は、その中で最も重要な場面でその人物の心理状態が語られている。小人たちが倒れている白雪姫を発見する場面である。白雪姫は小人の家で王妃に3度命を狙われる。グリム版では3度とも、白雪姫を見つけた小人たちの気持ちが語られているが、ベヒシュ

表3 その他の登場人物

登場人物	場面	グリム版	ペヒシュタイン版
①王妃 (実母)	冒頭	—	sich wünschte
		dachte	denken mußte
①王妃 (実母)	出産後	—	sich freute
②王	王妃の死後	—	bleiben wollte
③獵師	白雪姫を森へ連れて行く	durchbohren wollte	durchstoßen wollte,
		Mitleiden hatte	rührten
		dachte	dachte
④小人たち	白雪姫発見	so große Freude	mit Staunen
④小人たち	白雪姫の死(飾りひも)	erschrak	—
④小人たち	白雪姫の死(櫛)	in Verdacht hatte	—
④小人たち	白雪姫の死(りんご)	es beweinten,	—
		drei Tage weinten	drei Tage lang weinten
		begraben wollten	begraben wollten
		—	nicht senken wollten
④小人たち	王子との場面	Mitleiden mit ihm empfanden	von Mitleid bewegt wurden
⑤王子	生き返った白雪姫との場面	voll Freude	es lieb gewann

タイン版では、3度目のみである。倒れている白雪姫を見つけた時ではなく、小人たちが何をしても白雪姫は生き返らなかった時の小人たちの悲しみの気持ちが語られている。

4. おわりに

まず、グリム版「白雪姫」だけでなく、ペヒシュタイン版「白雪姫」にも心理描写があることを確認した。両者を比較して、グリム版「白雪姫」の方が登場人物の心理状態が詳細に語られていることを確認した。ペヒシュタイン版「白雪姫」では、全体を通して登場人物の心理状態が短く簡潔に語られているのだが、白雪姫7歳の場面と結婚式前の場面では、王妃

(継母)の心理状態が詳細に語られている。この2つの場面は鏡が王妃以外の女性を最も美しい女性と答える場面である。このような、王妃が精神的に大きな衝撃を受ける場面、且つ話の転換点となる場面において、ベヒシュタインは王妃の気持ちを丁寧に描いているのである。その一方で、別の場面では、蛙の比喩を用いて王妃の心理状態をユーモラスに語っており、「白雪姫」のような笑い話(Schwankmärchen)ではないメルヒェンにおいても、喜劇的效果を狙った語りを確認した。

さらに、ベヒシュタイン版「白雪姫」における心理描写の特徴として、登場人物を取り巻く状況や個人的な感情が語られていることを確認した。王妃(実母)が子供を望む理由と、王が再婚をした理由である。王妃が孤独であるという状況や王の再婚の動機が語られないとしても、話の筋の進行に影響はないことは、グリム版の「白雪姫」を見れば明らかである。しかし、白雪姫以外の登場人物の思考内容が白雪姫のことである場合にのみ語られるグリム版「白雪姫」と比較して、ベヒシュタイン版「白雪姫」では王と王妃は精神的奥行きを持った人物として描かれている。

主人公である白雪姫は、ベヒシュタイン版では小人を恐れ、装飾品に興味を持つ女の子として語られていることも確認した。ベヒシュタインの白雪姫は、メルヒェンの登場人物というよりは、現実に存在する人間と同じような感情を持ち合わせた人物として語られている。

このように、ベヒシュタイン版「白雪姫」では、心理描写が登場人物の特性を表現することで、その人物像を際立たせている。王と王妃の心理状態が白雪姫以外の別の面から語られることによって、精神的に奥行きのある人物として語られ、白雪姫も、メルヒェンの登場人物とは違い、現実に存在する人間のように描かれている。心理描写を通して登場人物を生き生きと描き、一方では深刻な場面でユーモアを交える、このような叙述の仕方がグリムの「白雪姫」にはないベヒシュタインの「白雪姫」の魅力なのではないだろうか。

注

- 1) ベヒシュタインの „Aus dem Sagenschatz der Thüringer“ を編集した Wolfgang Möhrig があとがきで述べている。(Ludwig(2003), S. 248.)

- 2) Bechstein, Ludwig: Deutsches Märchenbuch. Ausgabe letzter Hand: Ludwig Bechsteins Märchenbuch. 13. Auflage. Leipzig: Georg Wiegand, 1857. 4. Aufl. Berlin 2016.
- 3) Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Bd. 1., Frankfurt am Main 1984.
- 4) 「ついでながらこの装丁でルートヴィヒ・ベヒシュタインのメルヒェン本は、19世紀後半において、『子供と家庭の童話集』の影響をはるかに上回る極めて大きな人気を博した。」 „In dieser Aufmachung gewann es in der zweiten Hälfte des 19. Jahrhundert eine außerordentlich große Poplarität, die übrigens die Wirkung der Kinder- und Hausmärchen weit übertraf.“ (Wild, S. 122.)
- 5) 注4の引用部における「装丁」(Aufmachung)は、「ルートヴィヒ・リヒターのオリジナル画による187枚の木版画」(187 Holzschnitten nach Originalzeichnungen von Ludwig Richter)のことである。(Wild, S. 122.)
- 6) 「ベヒシュタインの語り方は、喜劇的效果を狙っており、完全に愉快なものであり、笑い話において最も存分にその才能を伸ばしている。」 „Seine Erzählweise zielt auf den komischen Effekt ab, ist durch und durch witzig; sie entfaltet sich in den Schwankmärchen am freiesten“ (Wild, S. 123.)
- 7) 「メルヒェンの登場人物には、そのような感情世界が欠けており、したがって彼らには精神的ないかなる奥行きもない。」 „Die Gefühlswelt als solche fehlt der Märchenfigur, und damit geht ihr seelisch jede Tiefe ab.“ (Lüthi, S. 15.)
- 8) 「特性や感情は、話の筋の中で語られる。」 „Eigenschaften und Gefühle sprechen sich in Handlungen aus“ (Lüthi, S. 15.)
- 9) 「我々の定義からすると、ヴィルヘルム・グリムのこの表現は、真の民衆童話の文体にはふさわしくない。」 „Nach unseren Bestimmungen entspricht diese Formulierung Wilhelm Grimms dem Stil des echten Volksmährchens nicht.“ (Lüthi, S. 101.)
- 10) 怒り (Zorn), 願い (Wunsch), 恐れ・驚き (Furcht, Schrecken) などの感情を表す言葉が60のグループに分類されている。(Dornseiff, S. 169-195.)
- 11) glauben, wissen, hoffen, sich vorstellen, ahnenなどの動詞が思考・感情型動詞として挙げられている。(Helbig/Buscha(1996), S. 197.)
- 12) 「しかしながら、メルヒェンに登場する人間は、主人公も脇役も、まるで自分たちと同じ存在であるかのように、これらの彼岸者たちと関わりを持つ。」

„Aber die Menschen des Märchens, Helden wie Unhelden, verkehren mit diesen Jenseitigen, als ob sie ihres gleichen wären.“ (Lüthi, S. 9.)

- 13) 「伝説は現実の人間や物を写實的に描く」 „Die Sage schildert in realistischer Weise wirkliche Menschen und Dinge“ (Lüthi, S. 13.)
- 14) グリム版では「革紐」(Schnürriemen), ベヒシュタイン版では「首紐」(Halsschnüre)である。ここでは両者を示すために「飾りひも」と呼ぶことにする。
- 15) 一方, グリム版でも1度しかない感情がある。怒り (Zorn) である。獵師に欺かれ, 飾りひもや櫛で自ら白雪姫を殺しに行ったにも関わらず, 白雪姫が生き返り, 「王妃は怒りでぶるぶるがたがた震えた。」(zitterte und bebte sie vor Zorn) この場面は, グリム版において王妃の心理描写が最も短い場面であり, その簡潔さと Zorn という言葉をこの場面においてのみ使用することによって, 王妃の怒りが際立っている。

参考文献

- Bechstein, Ludwig: Aus dem Sagenschatz der Thüringer. Hrsg. von Wolfgang Möhrig. 4. Aufl. Husum 2003.
- Dornseiff, Franz: Der deutsche Wortschatz nach Sachgruppen. 8. Aufl. Berlin 2004.
- Helbig, Gerhard, Buscha, Joachim: Deutsche Grammatik. 17. Aufl. Leipzig 1996. (G. ヘルビヒ/J. ブッシャ 在間進訳: 現代ドイツ文法 三修社 1991年)
- Lüthi, Max: Das europäische Volksmärchen. Form und Wesen. 2. Aufl. Bern 1960.
- Wild, Reiner(Hrsg.): Geschichte der deutschen Kinder- und Jugendliteratur. 2. Aufl. Stuttgart 2002.